レジュメ

ヤングアダルト文学概観

金原　瑞人

まず、「ヤングアダルト（young adult）」とは何か、英和辞典の説明は以下の通りです。

『ランダムハウス英和大辞典』　「1．十代後半の青少年、ヤングアダルト：出版社、図書館員が読者対象について用いる。略 Y.A.　2．成人期初期の人、大人になったばかりの人」

『リーダーズ英和辞典』　「十代の若者、ヤングアダルト（出版業界用語）、大人になり立ての人（ティーン）」

『ジーニアス英和大辞典』　「10 代後半の青少年：ハイティーン、若い成人」

『英辞郎』　「ヤングアダルト、若い成人、若年成人、十代後半の若者◆【略】YA」

辞書によって、かなりニュアンスが違うのですが、日本でも英米でも、それは似たようなところがあります。欧米のヤングアダルトむけの本でよくみかける表示に「12up」（12歳以上）というのがあり、これが最も包括的でわかりやすい説明になっているかもしれません。

さて、今回は、この「ヤングアダルト本」について概括的な話をしようと思います。

ぼくが赤木かん子と隔週で、朝日新聞の「ヤングアダルト招待席」という書評コーナーを担当したのが 1987 年。これは 3 年続きました。しかし当時まだ「ヤングアダルト」という言葉は日本で市民権を得ていませんでした。これが定着するのに 10 年以上はかかったような気がします。

そんな話をまじえながら、本、図書館、児童室、ヤングアダルトコーナーなどについて話すつもりです。

その中心になるのはいつ、なぜ、児童室ができたのか。そして、いつ、なぜ、どこでヤングアダルトコーナー（室）ができたのかという話です。

児童書が出はじめてしばらくして児童室ができ、ヤングアダルトむけの本が出はじめてしばらくしてヤングアダルトコーナーができるわけです。簡単にいってしまえば、図書館の歴史を社会的にみると、「大人」「大人＋子ども」「大人＋若者＋子ども」という社会の変化がみえてきます。これはそのまま、近代化による子どもの誕生、現代における若者の誕生ということです。

そこで世界で初めて若者文化が生まれた 50 年代のアメリカについて話をして、サリンジャーの『キャッチャー・イン・ザ・ライ』のインパクトに触れ、その後、若い頃に（おそらく）これを読んで影響され、青春小説を書きだしたスーザン・E. ヒントンやポール・ジンデルたちの作品、そして 70 年代後半のヤングアダルト小説（問題小説）の説明をする予定です。それから、もし時間があれば、日本のヤングアダルト小説についての話もできればいいと考えています。

ただ、みなさんからの質問にも答えたいので、疑問に思っていることなどまとめてきてくださると助かります。